



中高生とともに差別と闘う

『『ない』ことにされると』

吉成タダシ (うずしおランチ代表)



道半ば

前号まで、最後の中学生集會について長々と述べてしまいました。その後も衝撃的な学びの場面はいくつもありませんでした。そのうちの二つを紹介させていただきます。

昨年夏に開催された鳴門市人権地域フォーラムです。教えずであるシンジがパネリストとしてステージにあがるなか、フロアにいたヒロミが手を挙げ発言しました。シンジとヒロミは世代こそ違えど、共に学習会で学んだ仲間同士です。

はじめこそ簡単な自己紹介から小学時代・中学時代の思い出、部落差別を感じたときのこと、そしてパートナーとの出会いや自分のルーツを伝えたとのことについて語ってくれました。

——彼が私のことを家族に話したとき、お義父さんが大反対だったんです。ものすごい嫌悪感というか、絶対に認めない、会いもしないってなったとき、私もどうアプローチしていいかわからなくて。彼もすごく悩んだと思うんです。お義父さんから縁を切ると言われたとき、ずっと考えて考えて考えて、考え過ぎて過呼吸になって倒れたりもしてしまっただけでも、私と一緒に生きていくっていう道を選んでくれて——

他の家族は祝福してくれたことも話してくれました。そんななか娘が生まれ、中学生になり、出身校でもない学校で私と偶然再会す

るのです。中学生の娘に、会ったことのないおじいちゃんのことをどう伝えるか、ヒロミは悩んでいました。それはパートナーのことについてもでした。

——主人とは人権の話もしないし、人権問題とかに興味がないという。でもこの前、お酒も入っているという話しているうちに、やっぱりあるんだと思うんです。実の父に対しての思いが、縁切るくらいだったなら、なんで最初からそういう教育をしなかったんだと。泣きながらうたっている。主人は主人で苦しんでいるんだと思っただけで、主人の気持ちもいつか、簡単じゃないけど、楽にできたらなっと思っています。

苦しんだのは、彼女だけではありません。彼もまた同様に苦しんでいたのです。いや、もしかすると、彼女には共感し支えてくれる仲間がいることを思えば、彼の方がよりしんどかったかもしれせん。

私からすれば、「彼が通っていた学校はいったい何をしていたんだ！」という怒りの気持ちでいっぱいですが、どの子にも、どの学校でも、他人事ではない人権学習をしなければ、結果として子どもたちにも苦ししい思いを背負わせてしまおうということ、学校は自分事として、真剣に捉えなくてはなりません。学校とは、勉強ができればいいというわけではないのです。全人的な成長を促すのが学校の

ですから、その点をき違えてはいけません。彼に、ヒロミという存在がいて本当に良かったと思います。とはいえ、まだ道半ば。これからも共に歩みを合わせていきたいと思っています。

「ない」ことにされると

秋の人権ことも塾の場面。高一のKは訥々と、言葉を探しながら、絞り出すように語りました。

今まで学校の先生に、「みんな部落差別って知っていますか」みたいに聞かれても、シーンとなっていて。それで、「今はそんな差別とか全然見ないし、知らないよね」って言われて、「そうだよ」って思ってた。そこまで部落のこと意識しなかつたんです。

ある日、お父さんに、「実はボクのお父さんは部落出身なんだ」と言われて。それで私と妹は、「そうなんだ。でも別に……」みたいな感じだったんですけれど、そこからいろいろ話を聞いて。

私が学校に行けてない時期があった、それで、おじいちゃんがお父さんにかけてきて、その理由を後から知ったんですけど、私が学校に行かないのは、おじいちゃん部落出身だからじゃないのかって、めっちゃ泣きながら電話がかかってきて。まさかそんなに部落のことで悩ませてたのかって思ってた。そんなに意識してなかったけど、もうちょっと知っていききたい

など思ったし、おじいちゃんにもこの場に来てもらいたいなと思いました。

決して積極的なタイプではないK。そんな彼女が、おじいちゃんに対してこんなふうにも思っていた。なんて、思いもしませんでした。

いわれのない酷い差別を受ける人とはどうなるか。心的外傷ストレスとして、後々まで潜在化し、自身を責め続けることになってしまふことを、おじいちゃんは伝えているのだと思います。また、「いじめとか全然見ないし、ないよね」と言われると、「ある」とは言いにくいし、言えなくなってしまうか。本音を語り合うことはできるでしょうか。

似たような話が、ニュースでも見ます。教員の不用意な発言が子どもを傷つけたとか、それがもとで事件になったとか。それだけ教員の想像力が失われてきたのかもしれないし、それを補うだけの研修がなされていないのかもしれない。

いずれにしてもKには、共感性や自己開示のしようのない、深まらぬや豊かさのない人権学習にしかなくなっていること、こんな学習にしかなくていい現状で、どうして当事者が声をあげられるでしょう。学校教育の在り方そのものが問われているのだと思います。